

教師の 腕前診断

文 | 城ヶ崎滋雄 (千葉県公立学校講師)
イラスト | 吉田朋子

今回のテーマ

不安定だから安定できる (前編)

タイトルを見て、「おかしなことを言うなあ。不安定なら安定しないのではないか」と疑問に思われたのではないだろうか。

プロ野球の試合で救援に失敗したピッチャーが、マウンドを下るされ、タッグアウトのベンチを蹴り上げるシーンを目にするがあります。このとき選手は「ベンチを蹴る」という不安定な行為をすることで自分の憤りを解消し、心を安定させています。

同じように、私たちも、「不安定だから安定できる」経験をしています。もつとも身近なひとつは「歩く」ことです。

歩くためには体を前傾しなければなりません。そこで、無意識に片方の足が前に出ます。さらに体を倒すと、反対の足が前に出ます。こうして右左、右、左と交互に足が前に出る動きが「歩く」です。深く前傾すれば「走る」になります。

前傾という不自然(不安定)な状態を回避するために、足を交互に出すことで倒れずに進むのです。このように、一見不安定に見えることでも、実はそのお陰で安定を保っていられるということがあります。

このとき、不安定だと判断しているのは第三者であって、当の本人は自分を不安定だとは思っていません。

今回は子どもの不安定な状態をテーマにします。

1 机を蹴飛ばす

授業中、問題が理解できないことや友達の言

葉に対して敏感に反応する子どもがいます。彼らはイライラして机をガタガタと揺らし、蹴り倒してしまいます。机上にあったノートや教科書は床に落ち、筆箱に入っていた鉛筆は散乱します。

最後には、教室を出て行くこうとします。

Q1

先生はそんな子どもに
どんな言葉をかけますか。

- ①「なんで机を蹴るんだ!」「物に当たらない!」と強く注意する。
- ②「落とした物を」拾いなさい」と命令調で指示する。
- ③言葉をかけず、教室を出て行く子どもに目をやる。

公共物を大事にするという観点から、①のように叱るのは理解できます。苛立ちを物にぶつけるのは、八つ当たりです。机は物ですから、「痛い」とは言いませんが、低学年なら、「机が泣いているよ」と擬人化して叱ります。

また、教室という公共の場は散らかしたり汚したりしてはいけません。ですから、②のように原状に復帰させるのは間違った考え方ではありません。

しかし、①②は自分の気持ちを整える方法としては適切ではありません。子どもは、今はそんな方法でしか自分の気持ちを落ち着かせることができなさいのです。不適切、不安定な行動を選択することで、イライラが解消され、心の安定が図れるのです。

本来なら、教師は、机を蹴るという行為に至

らないような手立てを考えるべきなのでしょう。自分の気持ちをコントロールするスキルを身につけさせたり、子どもがキレないように事前の対応を取ったりすればいいのでしょうか。

しかし、実際にキレてしまったら、これ以上事態を悪化させないことが大事です。

子どもが冷静さを取り戻す関わり方を選択することで、教師とその子どもだけでなく、周りの子どもたちにとっても心穏やかに過ごせる教室となります。

子どもは、たとえキレていても、机を蹴るという行為が好ましくないことはわかっているはず。しかし、衝動を抑えることができません。「わかってはいるけど、止められない」状態なのです。子どもは、机を蹴ることでそのジレンマから解放され、徐々に落ち着きを取り戻していきます。



教師の腕前が試される、学級経営のひと工夫。

ベテラン先生によるケーススタディです。

こんな時、あなたならどうしますか？

それなのに、蹴ったことを指摘しては、せっかく落ち着いてきた気持ちを逆撫でするようになります。「そんなのはわかっているよ。わかっているけど、できないんだよ」と反発し、再び暴れてしまおうでしょう。

正論には逃げ道がありません。だから、窮鼠猫を噛む、になるのです。

このような子どもは、過去に何度も同じような経験を繰り返していることが多く、注意されるたびに自分を否定されたと受け止め、「どうせ自分なんか」と開き直り、諦めています。自尊心を損なった子どもは、自分を大事にできなくなります。自分を大事にできない人は他人を信じることはできません。

ドイツの哲学者・教育学者のヘルバルトは『管理』とは子どもに直接働きかけて教育を受け入れるための秩序を形成することである」と言います。とは言っても「おどかし」や「監視」は有効ではなく、子どもたちが間違った方向に行こうとする意志を押さえるのに役立つ「権威」と、子どもの感情の中に入って子どもと接触する手段である「愛」が有効であると考えています。

ヘルバルトは「監視」よりも「愛」が先だと言います。机が壊れる（物を大事にする）、拾いなさい（綺麗な環境を整える）という「監視」よりも、子どもが机を蹴る代償としての「心の安定」を察し、そうすることで子どもがどんな気持ちになるのかと忖度する「愛」が大事なのです。

「権威」とは威圧するということではなく、包み込む包容力です。安心感です。子どもはそこに「先生は僕を守ってくれる」という「権威」を感じるのです。そして、「この先生の言うことなら

聞こう」と信頼を寄せるのです。

そう考えると、③が賢明な選択です。

興奮はいつまでも続くものではありません。子どもはやがて、冷静になります。言葉をかけるのはそのときです。それまで教師自身と子どもを信じて待ちます。

だからといって、そのまま授業を続けてはいけません。先生は、机を元に戻し、散乱した物を机に乗せます。所定の場所にある机や整然と置かれたノートや教科書を見ることで、子どもは「普通」の状態に戻れます。

先生のこういふ姿は、周りの子どもたちの心に響きます。「先生は怒らない。大人って我慢強いんだな」と大人の権威をも示すことになります。「先生は、床に落ちた物を拾って、帰ってきたときに勉強ができるようにしてあげている。優しいなあ。」

先生に感化された子どもは一緒に落ちた物を拾い、机の上に揃えてくれます。「ありがとう」と感謝の言葉を伝えることで、人の役に立つことを子どもは学びます。協働によって志を共に

しているという一体感を得られます。

机が倒れ、床に物が散乱した教室が当たり前になつてしまうと、他の子どもも心が荒れてきます。散らかり、倒れたままの状態はおかしいと感じることで、整えよう、きれいにしようという心が生まれやすくなります。学ぶ場にふさわしい環境を提供するのが担任の務めです。環境は「人」を作ります。

ヘルバルトは「陶冶の意図をもって子どもの心情に直接的に働きかけること」を「訓練」と呼び、それに「教育の主要部分」があると云います。

子どもにとって机などの物の環境、先生という人の環境……「環境」が「教育の主要部分」なのです。

叱る、やり直しをさせることが指導の全てではありません。今回のように、やってしまったことを見逃すことが相手を許すことになります。相手はそれを感じ、応えようとします。ミラーリング効果です。

「許す」という先生の対応はクラスの子どもの安心感を生みます。「感情を優先することがあっても先生は許してくれるのだ」という信頼感です。

大部分の子どもたちは自分の感情に蓋をして学校生活を送っています。泣きたいときも、怒りたいときもグッと我慢しています。子どもらしさに蓋をしているのです。自分の感情を優先し、それを許してもらえたいということを今回の先生の対応で知ること、子どもたちは自分らしさをしっかりと発揮できると安心します。

紙幅が過ぎました。この後の対応は次回に譲ります。

